

## 死神の系譜

——ミュージカル『エリーザベト』の場合——

城田千鶴子

ミュージカル『エリーザベト』では、エリーザベトという150年も前に実在した人物がモデルになり、「死」というオーストリア古来の伝統的なモチーフが用いられている。また実際には暗殺されたエリーザベトが自ら死を望み、自殺したかのように形象化されている。にもかかわらず現代の聴衆の心を捉えることができるのはなぜなのか。

古い題材を現代に蘇らせている力はまさに脚色の妙技と言えよう。ハプスブルク帝国最後の皇帝フランツ・ヨーゼフの後エリーザベトの半生を帝国衰亡の歴史を背景に描くという、長大な題材を劇化するにあたって、語り手が設定される。その語り手がエリーザベトの暗殺者ルイジ・ルケーニであることが、全体の骨格を決定付けている。反社会的な人物の視点から捉えなおされたストーリーは、舞台と聴衆の間にイロニシユな距離を生み出す。聴衆はこれがひとつの解釈、ひとつの仮説に過ぎないことを意識し、様々な解釈が可能だという自由のなかに解放される。殺人犯ルケーニという痛烈な風刺者の差し出すストーリーは、聴衆自身の身の上の、あるいは現代の世相の様々な問題を思い起こさせずにはおかない。こうして聴衆は常に自分なりの解釈を重ねあわせるようになる。だからこそ聴衆は、エリーザベトと死神とのラブストーリーを、距離を置きつつ存分に味わえるのだ。

死神というモチーフを文学作品の中に形象化することは、古くから行われてきた。死の独特な捉え方については W. M. ジョンストンの著書『ウィーン精神』の中の「死への想念」という章の中で詳しく述べられている。ジョンストンはとりわけモーツァルトが死について述べている手紙に着眼し、オーストリア人の死の捉え方の典型とみなす。

モーツァルトにとっては死が、創造的な力となったのに対し、エリーザベトにとっては甘美な安らぎへの逃避としかかなり得なかった経過を、テキストの中に辿り、ひとつの解釈の試みとした。